布で包む「カバン」の、新たな出帆と裏方の声を、果たして歴史は、未来に何と記すのか。

KYOTO Technical Site

取材・文／竹中　聡（編集部）
撮影／江藤太亮

一澤信三郎帆布 ICHIZAWA SHINZABURO HANPU

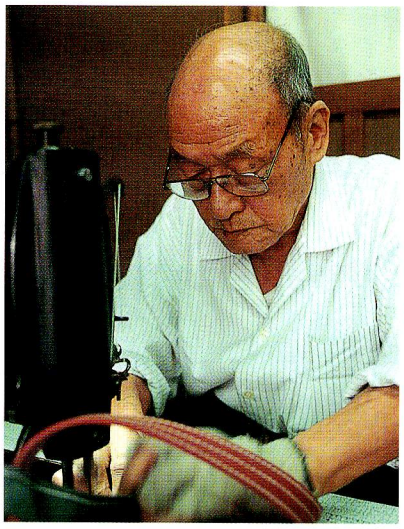
今や京都が誇る、帆布ブランドのお家騒動。船長から舵取り方から甲板員まで、出帆に至る一部始終より、航海中の声を聞く。

「撮影？　顔は堪忍して」。ここ数カ月、あらゆるメディアにお顔を出してきた社長である。辟易するお気持ちはお察しする。同社のここ数カ月の顛末については、もはや多くの説明は要らないだろう。ゴシップじみた取材も、単に「新しいもの」として飛びつくのも粋ではなかろう。当地のメディアとしては、現場の声を中心に紹介しようと考えた。

「入社試験は『50まで数えられるかどうか』（笑）。それに、どうもウチは玉石混合どころか、私を含めて男が頼りなくてね（笑）。ところがこの数カ月は『どこに隠してたんやな？』という気概を見せてくれた」。もちろん、それ以前に70人から80人を養わなければならないという状況で、「一人も欠けんとついてきた」ことに幸せと感謝を感じている。「何せ稟議書なんていうシステムもない会社（笑）」が、新商品を造るとなったら、「『はよビール飲みたいなぁ』と思ってても、アレやコレやと案が出てくるから帰れへんし、次の日には商品ができあがってくる」。それもスタッフの気概だろう。

店舗の引き渡しから、新会社・新店舗を立ち上げるまで、1カ月と5日。「準備なんて、やりだすとキリがない。走りながらの方が答えは出るもんです」。ゼロからのスタートだったが、「不思議なことでね、人の縁ちゅうのが支えてくれる。ウチは製造直売、

新たな誇りとアイデンティティとなった「布」へんに「包む」で「カバン」の一文字。題字は永六輔氏の、イラストは北見けんいち氏の賛同によるものだ



現役最年長の職人さんは社長の叔父さまでもある。断言してもいい。彼は商品を造ること以外には、何も考えていないだろう。それが職人ってものだ

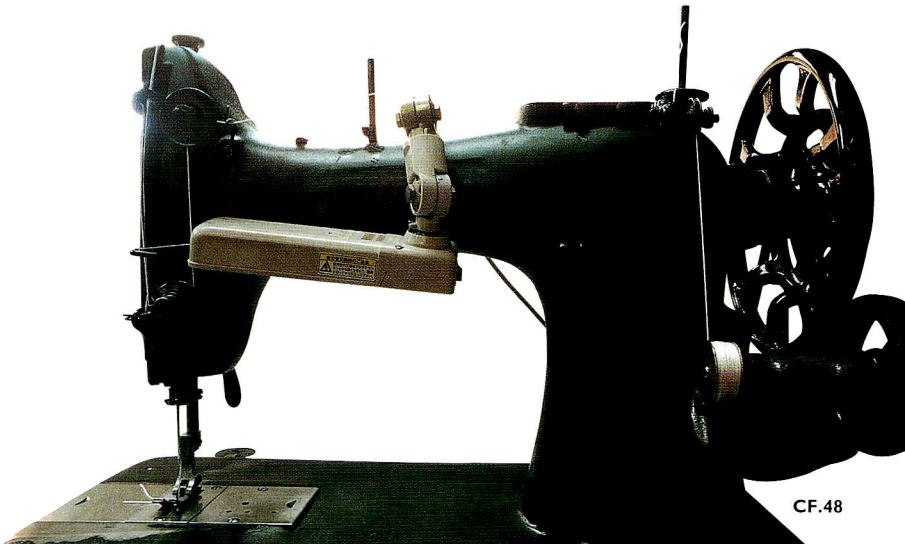
止まってもいないし、休んでもいない。

店舗担当の小澤康男さんは言う。「（世間でアレコレ言われることについては）バタバタしましたが、あっと言う間の船出でした。（店舗の担当者としては）職人が造ってくれたものを、納得して買っていただくことしか考えていません」。無礼を承知で休業期間の心持ちを尋ねてみたが、「（一澤帆布の）名前は使えなくなっても、良質の帆布製品を売ることができる、ということは解っていましたから」という。それで充分だったのだろう。

現在、商品は早い日は昼過ぎに売り切れてしまうというから人気のラーメン屋みたいだ。工房のスタッフはというと、「オープン準備から今まで約4カ月、本音を言います。隠しません。疲れてます（笑）。でも遠くからも買いに来て下さる方のお気持ちを考えるとね、素直に出社はしますけど、いや、あれ？『けど』じゃない（笑）」。とまぁ休日返上でミシンを踏み続け、縫製を続けている割にこれまた明るい。

「We Shall Return」と書いた横断幕を囲んで、スタッフが勢揃いした一葉が、事務所の壁に無造作にピンどめしてある。撮影日は平成18年3月1日。工場を明け渡した日だ。無血開城。悲壮感どころか、高揚感すら漂う。どう見ても鬨の声をあげている人もいる。「裁判所に楯突いて、籠もったっても良かってんけどね（笑）」と社長はまた笑う。これが社風というものか。

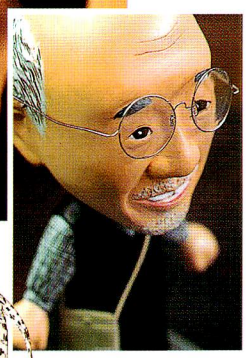
今、立っている足下がどんな様子であるか。それは遠い未来に「歴史」によって客観的に記される。同社のこの数カ月は激動であったろう。だが歴史はきっと、屋号が変わったことと、ほんの少し足踏みをしたことだけを、いやそれすら記録しないかもしれない。信じる者は、逞しく、何事もなかったように振る舞える強さを持っている。



御歳88才の叔父さま愛蔵、戦前の「SINGER社」のミシンが現役で活躍中。
1日あたり400～500個の生産が限度だという

お金とモノだけのやりとりやないと思うねん。だから人が心配もしてくれるんやろね。これが京都のええところなんかな」。

結局、社長のお姿がないと締まらないので、後ろ姿の撮影をご提案した。「どや？ 男の背中は泣いてる？（笑）」（スタッフに送られた自身の人形を持ってきて）これやったら前からでもええで（笑）」。裁判等々で、煩雑さに苛まれた方とは、にわかには信じがたい朗らかさなのである。それは荒波を越えた安堵感からなのか、もともと、そういう人で、そういう社風なのか。



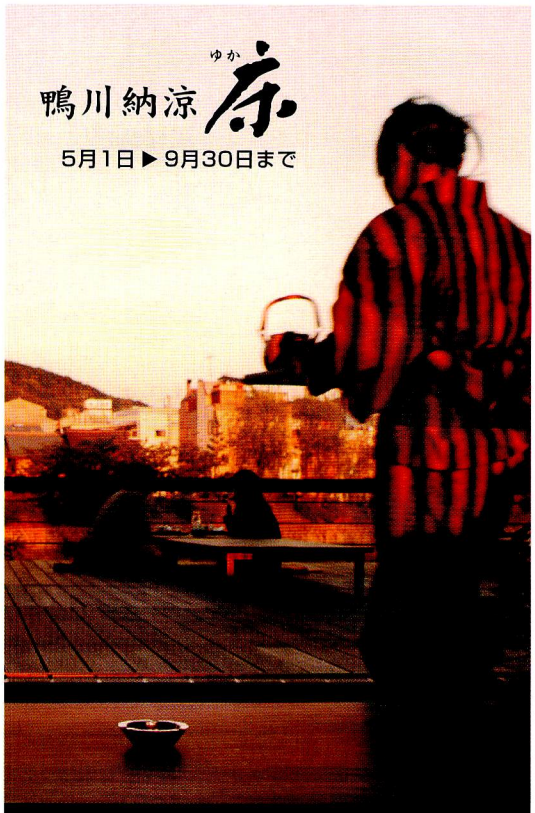
社長の一澤信三郎さん。「ゴメンなぁ。うるさいモデルで（笑）」とまぁ、とにかくよく笑う。1905年に帆布加工を始め、100年の節目で無地帆布の「信三郎帆布」と、本麻・柄帆布の「信三郎鞄」の二大看板で新たな出発

「真似や」言われるのもケッタクソ悪いし（笑）

新しい屋号はスタッフの発案。「『信三郎の名前を使いましょう』と言う。なんちゅうアホなことを（笑）」と思ったが、結局受け入れた。それはきっとスタッフへの感謝と敬意だ。「真似したと言われるのも思われるのもケッタクソ悪いんで（笑）」、それまではノミネイトしなかったコンビ柄に新色。戦後間もない頃の柄物は、今までは復刻に関しては否定的な意見が多く、実現しなかったものなのだが、それは綺麗に復刻する術がない、技術的な問題でもあった。「それが灯台もと暗しでね、その技術を持っている工房が近所にあったんや。こういうことになったからご縁ができたんやねぇ、わからんもんです」。鉄腕アトム柄のシリーズも、「気いよぉ（著作権を）貸してもらえた」、縁のあるシリーズだ。

一澤信三郎帆布　いちざわしんざぶろうはんぷ

京都市東山区知恩院前上ル東側　TEL.075・541・0436
営業時間 9:00～18:00／日休　※売り切れ次第閉店



SENKAKU

カジュアルな床で味わう、ホンモノの京料理。

仙鶴
Tazuru Annex

■ 京都市下京区木屋町通
松原上ル美濃屋町177
（阪急河原町駅から徒歩7～8分）
☎ 075-341-7511
営 夜床17:00～22:00（L.O.20:30）
夜のコース：6,300円～
不定休／駐車場有り
http://r.gnavi.co.jp/k009301/